



TITLE:

<学生の声> 「制御理論という大海原」

AUTHOR(S):

細江, 陽平

CITATION:

細江, 陽平. <学生の声> 「制御理論という大海原」. Cue 2012, 28: 60-60

ISSUE DATE:

2012-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/161287>

RIGHT:

学生の声

「博士とはなんぞや」

情報学研究科 通信情報システム専攻 小野寺研究室 博士後期課程2年 西澤 真一

学部4年生になると研究室に配属され、何らかのテーマを対象として研究を進める事になります。研究室は学術的もしくは工学的に意義のある研究開発を行うことが大きな目的ですが、従事する学生としては、ある目的を達成するために問題を探し、解析し、解決する能力を身につける場でもあります。さて、大学院には博士前期課程と後期課程があります。博士前期課程の延長線上に後期課程が存在するように見えますが、修士の学位とは異なり博士の学位は名刺等にも明記されます。それでは、博士の学位を取ることとはどういった意味があるのでしょうか。その考えは人それぞれだと思いますが、私は以下の2点と考えています。1つ目は、国際的に「一人前の研究者である」というお墨付きを得る事です。博士後期課程を通じて論理的思考能力と判断力をつける事で、世の中の問題を解決し貢献する事が期待されています。2つ目は、リーダーとしての能力を示すことです。世界的に見ると、博士の学位を取得した人の給与は高く、課長クラスである事もあります。逆に言うと、博士の学位を持つ人は、個人の能力だけでなく関係者の利害をとりまとめプロジェクトを成功に導く能力を会社および社会から期待されており、その期待に応える必要があります。博士後期課程の卒業要件である原著論文の数は、研究者としての論理的思考能力を数値化したものです。一方で、個人の意識は一朝一夕で得られるものではなく、日頃の研究の節々で意識しておかないと身に付かないものです。タイトルの「博士とはなんぞや」という言葉は私が学部生の時に先生方から問われた言葉です。この言葉を時折思い返しては、自分の期待されている立場を考え直すよききっかけとなっています。多くの方々にとっても、その立場を振り返るよい機会になればいいと思います。

「制御理論という大海原」

工学研究科 電気工学専攻 萩原研究室 博士後期課程2年 細江 陽平

私は萩原研配属から現在までの4年間、実験をほとんど伴わない、いわゆる理論研究に従事しています。工学の、特に電気系の分野では、対象となる何等かの実物が存在しない研究というのは比較的少数派であるように感じます。私自身、もともとは航空機のオートパイロットや工場のオートメーション等の技術に憧れて制御工学の研究に従事することを志望したのですが、今ではすっかりこの応用数学的な側面に魅了されています。

私が理論研究にはまっている理由はいくつかあります。まず、何らかの成果を得るまでの研究の過程で必要となるのが、基本的に頭で考えることのみだという点です。数値検証用のプログラミングを除いて作業という作業は必要とならず、紙とペンさえあれば、(むしろそれすらなくても?) 時間や場所を問わず研究に没頭できます。また、これに関連し、研究の遂行上、何等かの装置が必要となるなどの物理的な制約を受けにくいという利点もあります。常に理想的な環境下で研究ができるわけです。また、理論というものがある意味机上の空論であるからこそ、自由な発想のもと、一見無意味なことでも突き詰めて考えることが許される文化がある(ように思う)点も挙げられます。工学の研究ですので、その最終目標は当然ながら実社会で活かせる技術を開発することにあるわけですが、それに至るまでの過程において制約に縛られないさまざまな可能性を試せることは、非常に魅力的だと感じます。どちらかといえば論理的な思考が苦手であった私のような人間が進んで理論研究に従事しているのも不思議な話ですが、その現状に感謝し、残りの学生生活もめいっぱい研究を楽しみたいと考えています。